

ワーズワスと内向的感覚

山 田 修 治*

Wordsworth and His Introverted Sense

Shuji Yamada*

Wordsworth の詩は自然主義、感覚主義、神秘主義、汎神論といった表現であらわされるのが一般である。それは具体的にどういうことであつたのだろうか。今ここでは、特に、感覚主義的、神秘主義的な点について考えてみようと思う。

I

Tintern Abbey は1798年9月に出版された *Lyrical Ballads* 第1版の最後を飾る作品として納められた。159行からなる Wordsworth と自然との関係を基底にした、感覚主義、神秘主義、汎神論を主題にした作品である。表題は、*Lines Composed a Few Miles Above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour. July 13, 1798,* と付されている。Wye 河は、Tintern Abbey の横を通り Chepstow に向つて、Severn 川に流れ出している。Tintern Abbey 付近では、今日、まだ河幅も広く、河岸から河壁にねずみ色が目に映り、我々が想像する清流との表現は似合わない。蛇行する河に沿つて Monmouth の方向に遡るにつれ、風景は見る者の心に、更に幾重もの感慨を与え始める。

この作品では、Wordsworth と自然との関係が、Wordsworth の詩心の成長に伴つて、三つの段階に分けてうたわれる。幼少年期、自然は Wordsworth にとって “The coarser pleasures of my boyish days, / And their glad animal movements” (73—4) の対象であつた。青年期、Wye 河を初めて訪れた頃、Wordsworth は自然の中を「のろ鹿」のように駆けまわつた。“like a roe / I bounded o'er the mountains, by the sides / Of the deep rivers, and the lonely streams, / Wherever nature led.” (67—70) Wordsworth は活動的であつた。さらに、“more like a man / Flying from something that he dreads than one / Who sought the thing he loved” (70—2) とも一つの面が加えられる。自然は “all in all” (75) であり、“a passion” (77) であり、“An appetite” (80) であつた。官能的でさへあつた。Coleridge が “all man” と評することのあつた Wordsworth には稀な表現である。そればかりではない、“a feeling and a love, / That had no need of a

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences—Foreign Languages)

remoter charm, / By thought supplied, nor any interest / Unborrowed from the eye” (80—83) と、自然は Wordsworth にとって極めて明確な感覚の対象であった。23才。フランス革命に起因する不安と絶望の日々でもあった。

Wye 河を再訪した今、28才の Wordsworth にとって、自然は、詩心の転変の中で、相貌を変えていた。“all its aching joys” (84) も “all its dizzy raptures” (85) も、今は消えてしまっていた。しかし、その喪失を償うに余り有るものがあったのだ。思慮に欠ける若者としてではなく、時ある度に、“The still, sad music of humanity” (91) を聞きながら自然を見詰めるようになったからである。その調べは「荒々しくもなく」、「軋むこともなかった」— “Nor harsh nor grating, though of ample power / To chasten and subdue.” (92—93) そして、Wordsworth はさらに深化していった。

I have felt
A presence that disturbs me with the joy
Of elevated thoughts; a sense sublime
Of something far more deeply interfused,
Whose dwelling is the light of setting suns,
And the round ocean and the living air,
And the blue sky, and in the mind of man:
A motion and a spirit, that impels
All thinking things, all objects of all thought,
And rolls through all things. (93—102)

汎神論的である。Wordsworth の一つの到達点でもあった。後年、批判を受けながら、キリスト教に転向していく Wordsworth の宗教の核心になるものであった。

今、ここで見過ごせないことの一つは、こうした創造的な感覚的経験を生み出す Wordsworth の心的傾向のことである。どのようにして、こうした精神状態は形成されていくものであろうか。Tintern Abbey に示されるさらに別の箇所を見てみることにする。鍵はまず “these beauteous forms” (22) にあるようだ。自然の「こうした美しい形象」は Wordsworth にとって

have not been to me
As is a landscape to a blind man's eye:
But oft, in lonely rooms, and 'mid the din
Of towns and cities, I have owed to them
In hours of weariness, sensations sweet,
Felt in the blood, and felt along the heart;
And passing even into my purer mind,
With tranquil restoration: (23—30)

というのである。それだけではない。

Nor less, I trust,
 To them I may have owed another gift,
 Of aspect more sublime: that blessed mood
 In which the burthen of the mystery,
 In which the heavy and the weary weight
 Of all this unintelligible world,
 Is lightened: — that serene and blessed mood,
 In which the affections gently lead us on, —
 Until, *the breath of this corporeal frame*
And even the motion of our human blood
Almost suspended, we are laid asleep
In body, and become a living soul: (35—46) (イタリクス筆者)

これは特有の精神状態であろう。神秘的である。そして、Wordsworth のもう一つの特性は、詩精神の高揚していた時期、こうした心的傾向から逃れようとしたのではなく、むしろそれを積極的に求める傾向があったということである。自然に溶け込み、合体・合一したいという欲求を強く持ったということである。I. F. noteにもそのことは記されている。“At that time I was afraid of such processes. In later periods of life I have deplored, ..., a subjugation of an opposite character”¹⁾と語ったことがあった。そして Wordsworth はこうした一種の忘我状態・恍惚状態に沈静していった時、

While with an eye made quiet by the power
 Of harmony, and the deep power of joy,
 We see into the life of things. (47—9)

と言うのである。“see into”とは、止まることなく、内へ内へと内向していくことではないか。

「感覚」が「消滅」し、「内部世界」へ「沈潜」することによって「自己を越え」、さらに「死んだ自然の中に意識を目ざめさせる」というか、「自分がそういう純然たる物質の中に生き返る」というか、つまり“see into the life of things”ということである。そして、「至高の實在に近づく」という点、²⁾これは神秘的である。

こうしたことは Wordsworth の生涯の早い時期³⁾から経験されることであった。視覚の対象としてとらえられた光景が、その物質的な側面を消し去って、内向し、“a dream, / A prospect in my mind”へと変貌していく神秘的な経験は、*The Prelude Book II*でも回想して語られる。Hawkshead での早期の散歩の折、「つぐみ」のまだ鳴き始めないうちに寄宿舎を出て、谷間が“quiet in an utter solitude” (364) の状態に静まりかえっている時、独り頂に坐ったことがあった。

Oft in those moments such a holy calm

Did overspread my soul, that I forgot
That I had bodily eyes, and what I saw
Appear'd like something in myself, a dream,
A prospect in my mind.⁴⁾ (367-71)

“I forgot/That I had bodily eyes,” という特異な精神状態は、Wordsworth が生得的に体内に宿した、貴重な性向，であったように思われる。次に示す I. F. note は，そのことを暗示している。

I was often unable to think of external things as having external existence, and I communed with all that I saw as something not apart from, but inherent in, my own immaterial nature. Many times while going to school have I grasped at a wall or tree to recall myself from this abyss of idealism to the reality.⁵⁾

Wordsworth の感覚は極めて鋭敏であった。折に触れ，Wordsworth の精神が外界の事物に近づき，外界の事物が Wordsworth に近づき，親しく交わるという体験を持つことがあったというのだ。Wordsworth 自身が外界の事物と融合し，一体となり，事物の中に Wordsworth が生き，事物が Wordsworth の中に生きるという，特異な経験を持ったのだった。

こうした “great spiritual experience” は “comes generally not immediately after the sense-experience which has inspired it, but perhaps years later, when the original emotion, recollected in tranquillity, is rekindled.”⁶⁾ という特性を持っていた。*Lyrical Ballads* 第二版の Preface で Wordsworth が “Poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity”⁷⁾ と宣言した通りである。

Wordsworth は詩の源泉を「回想」⁸⁾に求めたのである。“spots of time”⁹⁾が詩作の生命となるのである。ここで留意しておきたいことは，「回想」するということは，記憶にもとづき原体験を追体験する過程を伴うものであり，外界の事物が何かの力によって，似かよった別の事物に変貌して，「現示」されることを予想させるものであろうということである。Wordsworth にとって過去の時間が緊迫した均衡状態を保って Wordsworth の詩の源泉でありつづけた時，詩精神は輝き，躍動し，代表されるよい詩編が書きつづけられたのである。

Wordsworth には，視覚としての「目」だけではなく，聴覚としての「耳」が，その肉体的機能を忘れ，陶醉状態へ沈潜していくこともあった。その時，自然の中の万象がかなでる楽の音は，

One song they sang, and it was audible,
Most audible then when the fleshly ear,
O'ercome by grosser prelude of that strain,
Forgot its functions, and slept undisturb'd. (II, 431-4)

ということであった。この状態に留まる時，Wordsworth は，「万象」に，“in all things/I saw one life, and felt it was joy” (II, 429-30) と言い切るのである。“one life” とは，自然の，自

然の生命の、「統一者」と解してよいであろう。“joy”という言葉は「個と全、意識と自然の分裂が癒され、有機的宇宙との一体感を味わう特権的瞬間を表わす語」¹⁰⁾としてイギリス・ロマン派詩人によって用いられたキーワードであった。“there exists/A virtue which irradiates and exalts/All objects through all intercourse of sense.”（Ⅱ，258—60）（イタリクス筆者）とうたう Wordsworth には、「感覚」に対する鮮烈な確信があったのだ。

「目」と「耳」から知覚され創造される“all the mighty world”¹¹⁾を愛する者として，“nature”と“the language of the sense”¹²⁾の中に“The anchor of my purest thoughts, the nurse,/The guide, the guardian of my heart, and soul/Of all my moral being”¹³⁾を認めて，Wordsworth は心喜ぶのであった。その“all the mighty world”は“both what half create,/And what perceive”¹⁴⁾と両面を備えたものであった。受動的に“perceive”するだけではなく，能動的に“create”するものでもあった。主体性を持ったものであったのだ。Wordsworth の感覚世界の特性である。

Wordsworth の感覚の向かう所は，*The Prelude* 執筆の原動力と一致するものだった。“Imagination having been our theme”（XIII，185）と示される。Snowdon 山頂で御来光を仰ぐために行なった登山の“unforgettable revelation to him of the transcendent power of the imagination”¹⁵⁾が，Wordsworth の“inner experience”の最「核心」としてうたわれている。Imagination が主題であったということは，それが又別の箇所でも言及されるということは自然なことである。ここでは，最もまとまりよく示されているという点で，Alps 越えの登山の体験を示すことにする。まだ登っている最中とばかり信じて行動していた時，もうすでに Alps を越えてしまっていたことを知らされ，愕然とし，悲嘆にくれたとき，

Imagination—here the Power so called
Through sad incompetence of human speech,
That awful Power rose from the mind's abyss
Like an unfathered vapour that enwraps,
At once, some lonely traveller. I was lost;
Halted without an effort to break through;
But to my conscious soul I now can say——
'I recognise thy glory': in such strength
Of usurpation, when the light of sense
Goes out, but with a flash that has revealed
The invisible world, doth greatness make abode,
There harbours; whether we be young or old,
Our destiny, our being's heart and home,
Is with infinitude, and only there;¹⁶⁾

（Ⅵ，592—605）（イタリクス筆者）

「畏怖」を伴い，「自我を越えた，大いなるものの存在」と，その「意味」を，「積極的」に認めたのである。¹⁷⁾ Selincourt の記述を参考に付したい。

No passage illustrates better than this at once Wordsworth's relation with the sensationist, empirical philosophy of the eighteenth century and the manner in which he transcends and spiritualizes it. All intellectual and spiritual growth comes from the reaction of the senses, chiefly of eye and ear, to the external world, which is 'exquisitely fitted to the mind', but the highest vision is superinduced upon this in a state of ecstasy, in which the light of sense goes out and the soul feels its kinship with that which is beyond sense.¹⁸⁾

Wordsworthの体験は感覚的であり、神秘的であった。

「想像力」は「自然界以外の所から発し」、「眼前の光景を仮の宿としている」。「自然界以外の所」とは「人間精神の内部」である。「目に見える光景の壮麗さは、その奥底にひそむ人間精神の作用によって一層輝きを増す。」¹⁹⁾ その「媒介をなすものが」時として例えば *The Solitary Reaper* の歌う “a melancholy strain” (l. 6) であったり、*Cuckoo* の “a wandering Voice” (l. 4) であったりする。

創造的な “imagination” を把握する以前の過程として、自然の “beauty” だけではなく “fear”²⁰⁾ によっても又育まれたという Wordsworth には、自然に対して又別の感覚があった。森の中には「霊」 “spirit” がいるという神話であった。 “Then, dearest Maiden, move along these shades / In gentleness of heart; with gentle hand / Touch——for there is a spirit in the woods.”²¹⁾ とうたわれるのである。

このことを物語る特に幼少時のいくつかの体験がある。たとえば「ヤマシギ」獲りの夜、激しい欲望に敗け、仲間の罌にまで手をかけてしまった時、静寂の中から聞こえてきたのは、 “Low breathings coming after me, and sounds / Of undistinguishable motion, steps / Almost as silent as turf they trod” (I, 330—2) であった。

日の暮れる頃、こっそり羊飼いのボートに乗り込んだことがあった。それはたしかに「盗み」の行為であった。静寂の湖面にしばらくボートを滑らせていった時、峰の背後から、 “the huge Cliff / Rose up between me and the stars, and still, / With measur'd motion, like a living, / Strode after me” (I, 410—2) という体験を持つことになった。この体験は、時間と共に、消え去っていく類のものではなかった。Wordsworth は強烈な幼少年時の体験を、ただの思い出として放置してしまえる類の人間でもなかった。

after I had seen
That spectacle, for many days, my brain
Work'd with a dim and undetermin'd sense
Of *unknown modes of being*; in my thoughts
There was a darkness, call it solitude,
Or blank desertion, no familiar shapes
Of hourly objects, images of trees,
Of sea or sky, no colours of green fields;

But huge and mighty Forms that do not live
Like living men mov'd slowly through my mind
By day and were the trouble of my dreams.

（I, 417—27）（イタリクス筆者）

山の峰が山の峰で在りつづけない所に Wordsworth の不思議さがある。山の峰が変貌してしまうのだ。それは山の峰の存在が変わったのではなく、特異な状況の中で山の峰を見る Wordsworth の意識の中で、存在の「様式」が変わったのだ。そしてその変貌した山の峰の恐ろしい姿を見て以来、“unknown modes of being”（「存在の見知らぬ様式」）の在ることを知った Wordsworth は、漠とした、決め難い意識に心悩まされるようになるのだった。自分の精神と外界との接点に“unknown modes of being”が在り、それは「なかば知覚」され、「なかば創造」されるものであることの、むしろ「不安」を感じ取ったのだった。Wordsworth の精神作用には何か秘密がある。

つづく詩行で、こう「霊」に呼びかけられる。“Wisdom and Spirit of the universe! / Thou Soul that art the Eternity of Thought! / That giv'st to forms and images a breath / And everlasting motion!”（I, 428—31）さらにスケート遊びの体験がうたわれたあと、もう一度、“Ye Presence of Nature, in the sky / Or on the earth! Ye Visions of the hills! / And Souls of lonely places!”（I, 490—2）と呼びかけられる。

イギリスの人類学者 Tylor（1832—1917）が初めて使った animism という言葉は、“the general belief in spiritual beings” という意味を込めるものだった。そして、“spirits” というのは “not only to gods and divinities, but also to souls of the living and the dead” にも用いられる言葉²²⁾であった。とすると、Wordsworth には animism の特質があったということになる。“a Spirit / Living in time and space”（VIII, 763—4）といった表現は、Wordsworth の詩の随所に見い出せるものである。“the meanest of created things”²³⁾にも “a spirit and pulse of good, / A life and soul, to every mode of being / Inseparably linked”²⁴⁾と考えるのが Wordsworth であった。Beach の表現を借りれば、こう表現されることになる。

Nature is. . . conceived of, not merely as the order of things, the norm of conduct, the expression of benevolent design, but more specifically as the animating or activating principle of all things in the universe—not merely of living things, but of all phenomena.²⁵⁾

Wordsworth の animism には、「自然」が「霊」そのものである場合と、「霊」が「自然」の中に動き、働く存在として表現される場合とがある。

Wordsworth の感覚、主観には何か特異なものが秘められている。

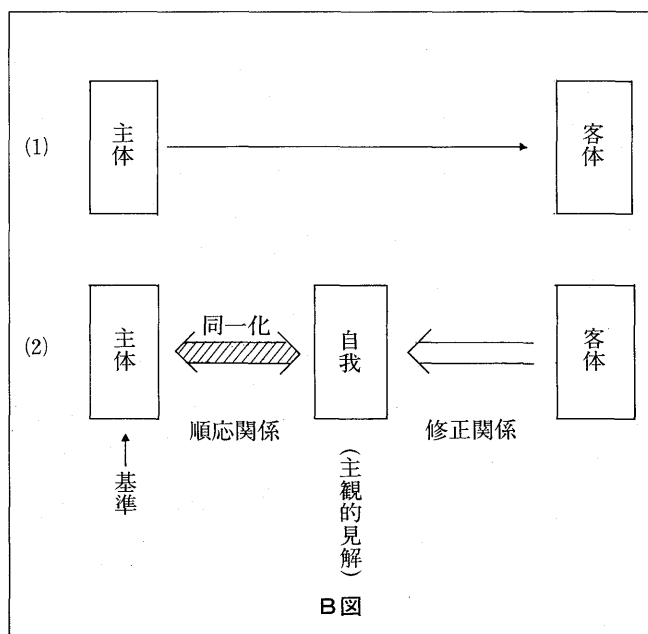
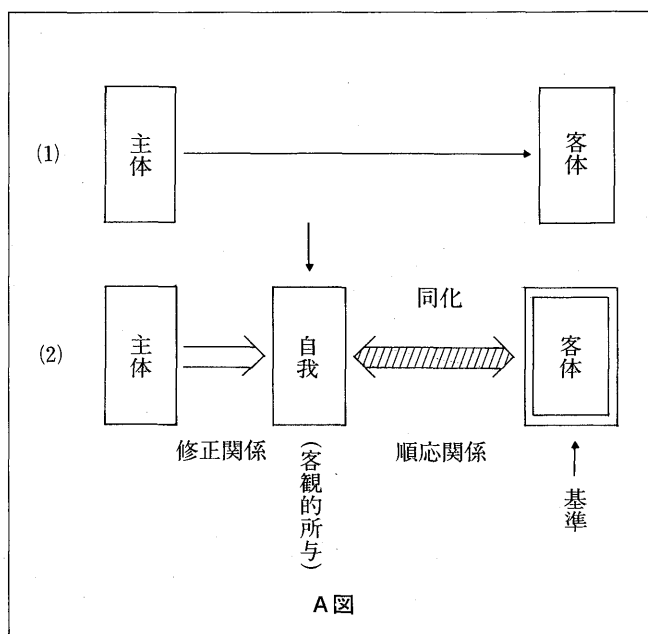
II

スイスの心理学者 C. G. Jung (1875—1961) は、人間のタイプを、主体の客体に対する基本的態度によって、「外向的」及び「内向的」の二つの型に区別し、人間理解をすすめた。Jung に依れば、「外向型」の人間の場合、「客体に対する態度は積極的」であり、「客体の持つ意義を非常に高く評価し」、「自分自身の根本態度を、いつも、客体を基準にして決定したり、これと関係づけたりする。」²⁶⁾つまり「主体が客体に近づく

場合、客体を基準として主体を修正しようとするという態度」²⁷⁾で、このことを樋口氏の図²⁸⁾に従えば、A図の(1)及び(2)のように示される。この場合、「主体が客体の諸要求の全くの犠牲になるから」、「傷ついた主体」の方は「無意識」の方向に向かうことになる。すると、「やがて無意識から」の「補償」を求める「反作用」が起こり、Jung が指摘する「ヒステリー」等の「症候」をこの主体が現わす原因となる。²⁹⁾

これに対し、「内向型」の人間の場合には、「客体にたいして抽象的な態度」をとり、「まるで客体が自分に対して優位に立つこと

を予防せねばならぬとでもいうように、客体のリビドーを奪うことしか考えていない。」³⁰⁾つまり「客体や客観的所与」によるのではなく、主体の「主観的要因」により「基本的態度が決定される」³¹⁾のである。再度樋口氏の図³²⁾に従えば、B図のように示される。「客体と主体との間に



知覚を通して得られた主観的見解」を、「内向型」の人間の場合、「自分の主体と同一化するという特徴をもっている。」しかし実際には、「人間の主観的見解と主体そのものとは差異」があり、それをあえて「同一化」してしまおうとするために、ついには、「無意識の中心である自己が現われて」、自我に「補償を要求」してくる。その結果、この型の人間が陥るものとして、Jung は「神経衰弱症」をあげる。「後までも残る不愉快きわまりない興奮、追跡されるような感じ」、「内面の戦い」「異常に敏感」な神経などが「症候」として現われる。³³⁾

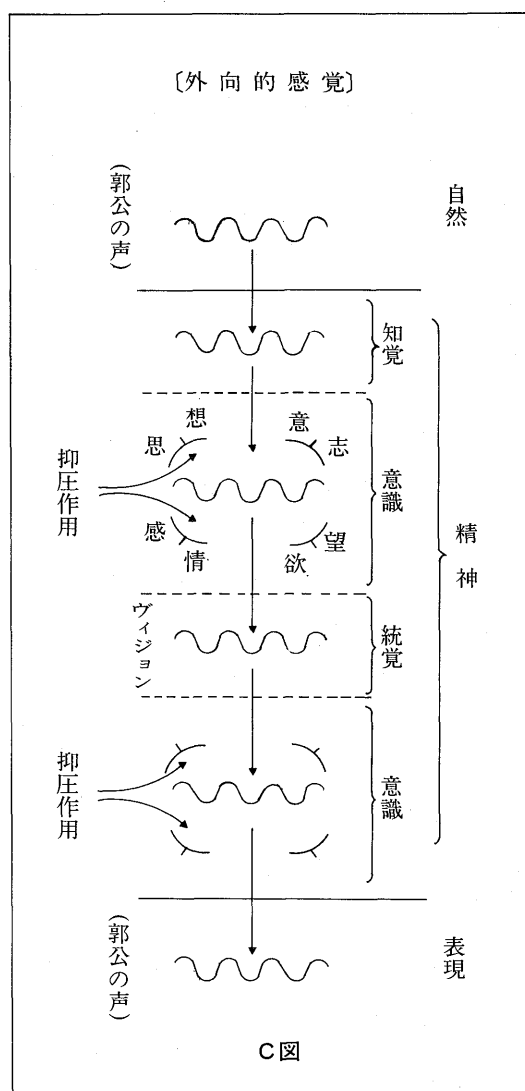
Jung はさらに人間の四つの心理機能（思考、感情、感覚、直観）に応じて、外向的思考タイプ、外向的感情タイプ、外向的感觉タイプ、外向的直観タイプ、及び、内向的思考タイプ、内向的感情タイプ、内向的感觉タイプ、内向的直観タイプに分けて、人間理解を深めた。（ここで、「タイプと呼ぶものは人間の興味やリビドーの方向性によって区別されている。」³⁴⁾）

〔外 向 的 感 覚〕

今対象となるのは Wordsworth であり、心理機能のうちの「感覚」であることから、それぞれのタイプのうち、外向的感覚タイプと内向的感覚タイプに限定して考えることにする。まず外向的感覚について整理してみる。

「心理の根本態度が外向的である場合には、感覚は主として客体によって規定」され、その場合感覚の「主観的要素」は「阻害されたり抑圧されたり」する。客体が知覚から意識を経て統覚に至る際、「感覚自身が優位を占めている場合には……客体感覚のうちのいかなる部分も締め出されたり抑圧されたりすることがない。(ただし、先に述べたように、一定の主観的要素が混入することは避けがたい。)」そして「感覚はもっぱら客体によって決定せられ、最も強烈な感覚を誘発する客体が、その個人の心理の決定的要素となる。かくして客体への明白な感性的な繫縛が生れる。」³⁵⁾

この外向的感覚を、上島氏の図³⁶⁾（C図）をもとにたどってみると、「感覚自身が優位」な場合、「客体及び客体からの刺激」としての郭公の声は、そのまま五感によって客観的

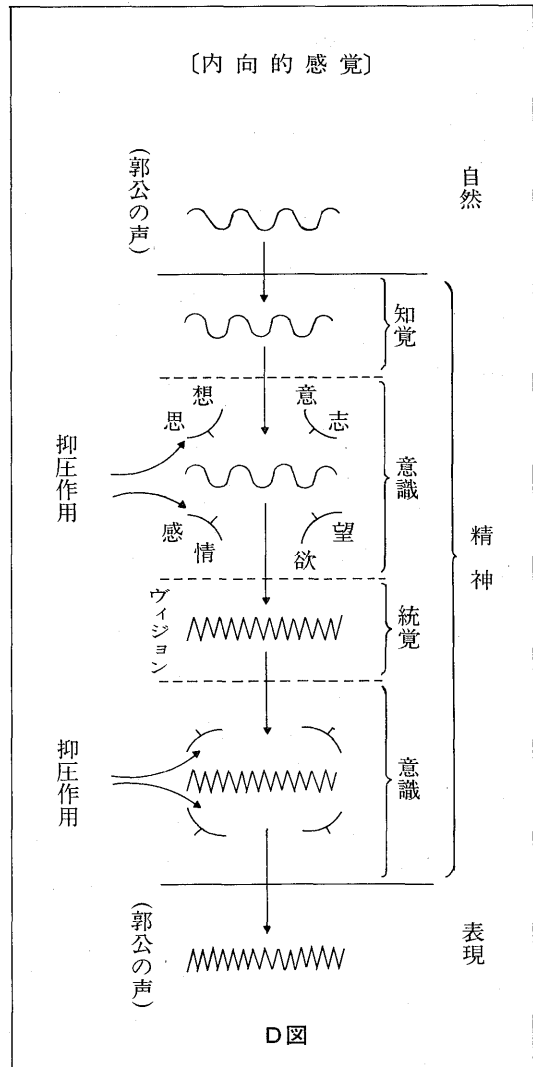


に知覚される。この知覚は、主観的要素である意識・無意識の抑圧（作用）を受けることなく統覚において印象（ヴィジュアルイズ）づけられ、再度意識を通して「客体感覚のうちのいかなる部分も締め出されたり抑圧されたりすること」のなかった客体として表現される。従って、外向的感覚タイプの人の場合は「知覚が幅を利かし他のあらゆる要素を抑圧してそのまま認識の座に鎮まろうとする。」³⁷⁾ このタイプの場合、「客観的事実に対する感覚が異常に発達」しており、「具体的で現実的なもの」が最優位であり、「自分の内部からくるものはすべて病的で軽蔑すべき」³⁸⁾ 対象となる。

これに対し、「内向的の根本態度を取っている人々の場合」，「感覚は、主として知覚のなかの主観的部分を基礎とし」，客体の知覚に際しては，「感覚機能における主観的要因」が「感性知覚が生まれるときにすでにこれに変化を加え……純粋に客体からの刺激だけで出来あがったものという性格を奪ってしまう」のである。特に，主観的要因が強力に作用すると思われる「芸術」の場合，「客体からの刺激はすっかり抑圧され」，「客体からの働きかけは単なる触媒に成りさがって」しまうことさえある。「外向的感覚による把握の対象が誰の眼にも明らかな事物の現状であるのに対して，内向的感覚にあっては，単なる感性的印象も，予感にみちた深淵の方向を志向」する³⁹⁾ という結果が間々生ずるのも，こうした精神作用に起因することなのである。

このことを再度上島氏の図⁴⁰⁾（D図）を頼りに確認してみる。主観的要素の作用が強いため，五感による知覚は「印象を生みだすための触媒に成り下って」しまい，客体及び

客体からの刺激としての郭公の声は，主観的要素である「意識・無意識によるさまざまな抑圧を受け，統覚に達した時にはすでに純然たる」当初の客体としての声ではなくなっている。この声は統覚において，主観的にさまざまに変貌した郭公の声として，印象（ヴィジュアルイズ）づけられ，再度意識を通して，外に表現される。極端な場合には，当初の客体とは予想もつかな



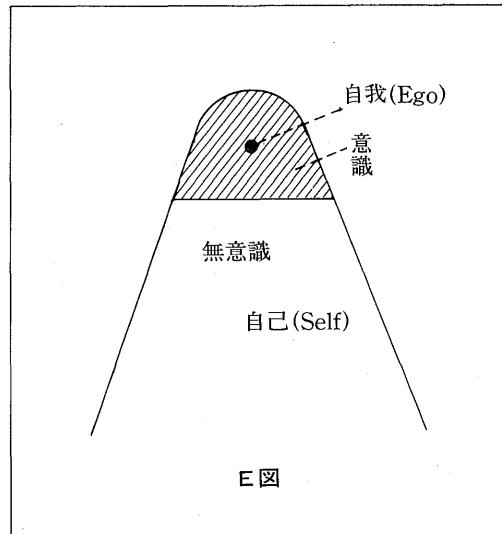
い変貌を示すことさえある。かくして、内向的感覚タイプの人の場合、「感覚は印象の方に重点をおき、他の要素および知覚のもつ客体性を抑圧して認識の座に鎮まる」という作用のしかたを取ることになる。⁴¹⁾

この「内向的感覚タイプを方向づけるものは、感覚のうち客体からの刺激によって主観のなかに触発せられた部分の強度のいかんである。当然のことながら、そのさい客体と感覚とのあいだに見られる関係は、決して釣合いのとれたものではなく、むしろ全く不釣合いで恣意的なものである。」極端な場合には、「客体からの働きかけは主体のところまで達していないかのような印象を受ける」程である。もしこの内向的感

覚タイプの人間が、「自分の感覚の強度に相応した表現能力と表現意欲とを」兼備していたとしたら、それは、「創造的な芸術家」たりうる⁴²⁾精神作用と可能性とを秘めたことになる。

次のE図⁴³⁾はJungが人間の「心」(psyche)をどう捉えていたか⁴⁴⁾を樋口氏があえて図式化したものである。内向的感覚タイプの人の場合、この「無意識の勢力がふだんよりほんのわずかでも増大すると」、自我の「感覚のなかに含まれている主観的要素の活動が活発化し、そのため客体からの働きかけがほとんどすっかり蔽い隠されてしまう。その結果……主体の方でも、現実を正しく理解することが出来なくなる。……それが昂じてくると、その人間はもはや現実と主観的知覚との区別がつかなくなってしまう」⁴⁵⁾のである。あの、既にみてきた、Wordsworthの神秘的な心性の密秘は、ここから来たのではないのか。1815年に出版された *The Collected Poems* につけられた *Essay, Supplementary to the Preface* で、Wordsworthは詩についてこう明言したことがあった。“The appropriate business of poetry. . . , her appropriate employment, her privilege and her duty, is to treat of things not as they *are*, but as they *appear*; not as they exist in themselves, but as they *seem* to exist to the senses, and to the passions.”⁴⁶⁾

その結果、こうした内向的感覚タイプの持主がついに行きつくところは「漸次客体の現実から遠ざかり、もっぱら意識を原始的な現実と都合のよい方向に向わせるところの、主観的知覚だけに頼るようになる。彼自身は、比較判断の能力を欠いているためこの事実に関心がないけれども、実際の彼は精神的世界に住んでいるも同然であって、この世界においては、人間・動物・鉄道・建物・山・河などのすべては、彼の眼に慈愛深い神とも、また意地の悪い悪霊とも映ずるのである。彼は、それらがそのようなものとして自分の眼に映っていることに気がつかない。けれどもそれらはそのようなものとして彼の行動なり判断なりに影響を及ぼす。つまり彼は、自分がまるでそのようなものと交渉せねばならないかのように判断し行動する。」⁴⁷⁾ Animismの精神



を明かす鍵ではないだろうか。

Keats が Wordsworth を “egotistical sublime” と評し、Coleridge が Wordsworth は “the dread watch-tower of self” から見つめると評したごとく、自意識の強かった、非常に主観性の勝っていた Wordsworth を、「人間のタイプ」として、Jung が示した「内向型」とするのは無理なことではないであろう。とすれば、Wordsworth の感覚を「内向的感覚タイプ」とすることも又無理なことではない。Wordsworth は「内向感覚に繫縛された人間であり、そのためしばしば異常な経験を詩に残した」⁴⁸⁾ということになるのではないか。神秘主義的であり、極めて鋭敏な内向的感覚を持った感覚主義者であり、特に生涯の初期に顕著であった、animistic な心性を秘めた Wordsworth の精神作用を理解する鍵が、幾らか開かれたように思われる。

III

「死」について、幼くして、“Nothing was more difficult for me in childhood than to admit the notion of death as a state applicable to my own being”⁴⁹⁾というイメージを持った Wordsworth にとって「不滅」(“immortality”)についての意識は、生涯重要な課題であった。*The Prelude* 執筆に際し、“the Snowdon ascent”は作品の核心になるべき部分であった。それは、取りも直さず、Wordsworth の詩心の成長の核心になることでもあった。今日残されているこの部分に関係する草稿に、Wordsworth が “the two great presences” について到達した真実として “God and the immortality of life/Beneath all being evermore to be” の2行が Selincourt の解説と共に見い出される。⁵⁰⁾ つづいて同じ箇所 Selincourt は “This is the simplest statement which Wordsworth ever made of the central experience of the mystic” との評を加えている。

この懸案であった “immortality” の問題は、*Ode* としてやがて書き上げられた。異説もあるが、これも Selincourt によれば1804年3月であった。“after Milton's *Lycidas* this is the most important shorter poem in the language”⁵¹⁾と今日評されている。この *Ode* の作詩にあたって Wordsworth には意図するところがあった。I. Fenwick はこう書き残した。

a pre-existent state has entered into the popular creeds of many nations; and, among all persons acquainted with classic literature, is known as an ingredient in Platonic philosophy. Archimedes said that he could move the world if he had a point whereon to rest his machine. Who has not felt the same aspirations as regards the world of his own mind? Having to wield some of its elements when I was impelled to write this Poem on the 'Immortality of the Soul', I took hold of the notion of pre-existence as having sufficient foundation in humanity for authorizing me to make for my purpose the best use of it I could as a Poet.⁵²⁾

(イタリクス筆者)

Wordsworth は “the notion of pre-existence” を「利用した」のだった。ちなみに “Despite schol-

arly tradition, which has found “sources” for the Ode in Plato’s Phaedrus and his Phaedo, it is well to remember that Wordsworth actually denied any Platonic influence.”⁵³⁾との評は参考になるであろう。

この *Ode* は最初の 4 連がまず 1802 年 3 月 27 日に書かれた。第 1 連で Wordsworth はかつて

There was a time when meadow, grove, and stream,
The earth, and every common sight,
To me did seem
Apparelled in celestial light,
The glory and the freshness of a dream. (1—5)

と追想する。想像力を追う Wordsworth は、かつての “visionary hours”⁵⁴⁾ を求めて、第 4 連でその「喪失」をうたう。“Whither is fled the visionary gleam? / Where is it now, the glory and the dream?” (56—7) *Ode* の主題の一つは、かつての輝かしい「光」と「夢」を求めて、その「消沈」と「失意」をうたうことであった。

しかし「失意」の中で、佇みつづけないことが Wordsworth の文学であった。*Tintern Abbey* でも “Not for this / Faint I, nor mourn nor murmur; other gifts / Have followed” (85—7) とうたわれた。Wordsworth にはかつての神秘的な経験があった。それらに対する執拗な自問 “those obstinate questionings / Of sense and outward things, / Fallings from us, vanishings” (142—4) は自己確認の喜びとなった。それだけではない。鋭い感覚による “Blank misgivings of a Creature / Moving about in worlds not realised, / High instincts before which our mortal Nature / Did tremble like a guilty Thing surprised” (145—8) や, “those first affections, / Those shadowy recollections” (149—50) を感じ取った日々を思い起すことは、常に Wordsworth の心の中に「不断の祝福」を生み出してくれるものだった。「失意」に対する「補償」であった。それをうたうことは、*Ode* のもう一つの主題でもあった。

“Another race hath been, and other palms are won.” (200) 「いま一つの行程は終って、別の栄冠が得られたのだ。」⁵⁵⁾ “other palms” が具体的に何だったのか。Wordsworth は一つ前の stanza で

What though the radiance which was once so bright
Be now for ever taken from my sight,
Though nothing can bring back the hour
Of splendour in the grass, of glory in the flower;
We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind: (176—81)

とうたう。それは、Wordsworth に豊かであった “the primal sympathy / Which having been must ever be” (182—3) であり, “the soothing thoughts that spring / Out of human suffering” (184

—5) であり, “the faith that looks through death” (186) であり “years that bring the *philosophic mind*” (187) (イタリクス筆者) であった。しかし, 感覚をたよりとする Wordsworth の想像力にはそれらは新たな飛翔とはならないのである。

Though inland far we be,
Our Souls have sight of that immortal sea
Which brought us hither,
Can in a moment travel thither,
And see the Children sport upon the shore,
And hear the mighty waters rolling evermore. (163—8)

とうたうに止まるのである。「魂があゝの不滅の大海をかいま見」, 「その浜辺に子供達が戯れるのを眺め, 強大な波が永遠に打ち寄せるのを聞く」ところまで高揚した想像力は, つづく新たな飛翔へと羽搏かないのである。Ode は “To me the meanest flower that blows can give / Thoughts that do often lie too deep for tears.” (203—4) の2行で終る。

幼年期こそ人間生涯の最も輝かしい時期だと考えた Wordsworth は, 年をとることを, 「自然の今なお司祭である青年に伴ったすばらしいヴィジョン」(72—5) が, “At length the Man perceives it die away, / And fade into the light of common day” (76—7) と感じた。30才の半ばに達して, Wordsworth は「年月」は “the philosophic mind” をもたらす悟りの「力」なのだととうたうに止まった。Wordsworth が詩の源泉としえたのは “a feeling and a love, / That had no need of a remoter charm, / By thought supplied, nor any interest / Unborrowed from the eye”⁵⁶⁾ であった。Plato に関する “the notion of pre-existence” の「利用」も新たな想像力へと結実することとはなかった。Plato のイデア界への道は, 理性と感覚を厳しく分け, 「非感覚」なものであった。この作品の完成した1804年から, 弟 John の海難死 (1805) を経て, Wordsworth の詩的想像力は急激に衰退していった。並行して, 本人の定かに意識しないまま, 保守的, 道徳的「信条」が定着しつづけていった。Ode でうたわれた「喪失」と「失意」と「補償」は, 生来感覚的であり哲学的ではなかった Wordsworth 自身の, 想像力の限界を物語るものではなかっただろうか。

IV

Wordsworth は感覚の人であった。「事実に基づいた部分を感覚によってとらえることによって次第に全体へと至る」⁵⁷⁾ というのが感覚の人の認識方法であった。Wordsworth は理性, 思想といった抽象的思考を得意とする人間ではなかった。“all the mighty world / Of eye, and ear” に異常な程敏感な, 内向的感覚による主観的印象を生命とした。この感覚が数々の神秘的な経験を可能にした。この感覚が Wordsworth に “We see into the life of things” と確信させ, 万物に “one life” を認め, “spirit” と交わり, “unknown modes of being” の存在することを感知させたので

ある。

Wordsworth が “spots of time” を手懸りに「回想」が詩的緊張状態を維持していた時、感覚的詩魂は見事に躍動した。しかし Wordsworth の感覚は、原体験を基に自己の内部に一旦確立された印象をさらに変貌させていくということはできなかった。主観的印象を固執する感覚は、やがて Wordsworth の主観的印象をまぼろし化し、感知された「心の深奥の〈現実〉」を分析し表現可能なものにする⁵⁸⁾ことを拒んだ。Wordsworth の想像力による深淵な経験の成果は間違いなく評価されるものであるが、「直観的理性の参与しない悲しさ、それが何であり、どう実人生とかかわっているかはついに明らかにできなかった。」⁵⁹⁾ Jung の考えをもう一度借りよう。「外向的かつ原始的な性格を持った機能である直観が抑圧されているというのがこの型（内向的感覚タイプ）の人間の無意識の主な特色である。」⁶⁰⁾（ ）内筆者加筆。「直観における知性的機能を排除」⁶¹⁾せざるを得なかった Wordsworth は、内向的感覚を特性としたと同時に、それを又詩人としての限界とせざるを得なかった。これを暗示するかのような詩編が *Lyrical Ballads* の初版（1798）に見られる。

—It is the hour of feeling.

One moment now may give us more
Than years of toiling reason:
Our minds shall drink at every pore
The spirit of the season.

Some silent laws our hearts will make,
Which they shall long obey:
We for the year to come may take
Our temper from to-day. (To My Sister, 23—31)

1798年当時 Coleridge は Stowey に住んでいた。Wordsworth は Coleridge から 4 マイル程離れた Alfoxden に家を借りる機会に恵まれた。詩魂は高揚し、やがて *Lyrical Ballads* へ結実する時期に、居を共にしていた妹に *To My Sister* としてうたわれた一篇であった。

同じ年の春、Coleridge の紹介で Alfoxden を訪れた Hazlitt は Wordsworth にはじめて会った。その時 Hazlitt は Wordsworth と “metaphysical argument” を基に、本の効用について議論しあうことがあった。効用を力説する Hazlitt に対して、Wordsworth は *Expostulation and Reply* と *The Tables Turned* の二篇の詩でこれに答えた。Matthew (=Hazlitt) に対し、Wordsworth はこう諫めた。

“The eye—it cannot choose but see;
We cannot bid the ear be still;
Our bodies feel, where'er they be,
Against or with our will.

"Nor less I deem that there are Powers
Which of themselves our minds impress;
That we can feed this mind of ours
In a wise passiveness. (17—24)

そして、立場を代えて Wordsworth はこう反論したのであった。

Book! 'tis a dull and endless strife:
Come, hear the woodland linnet,
How sweet his music! on my life,
There's more of wisdom in it.

And hark! how blithe the throstle sings!
He, too, is no mean preacher:
Come forth into the light of things,
Let Nature be your Teacher.

She has a world of ready wealth,
Our minds and hearts to bless——
Spontaneous wisdom breathed by health,
Truth breathed by cheerfulness.

One impulse from a vernal wood
May teach you more of man,
Of moral evil and of good,
Than all the sages can.

Sweet is the lore which Nature brings;
Our meddling intellect
Mis-shapes the beauteous forms of things:——
We murder to dissect.

Enough of Science and of Art;
Close up those barren leaves;
Come forth, and bring with you a heart
That watches and receives. (9—32)

Wordsworth の考えを明確に示すものであった。特に後年改訂することが大きな仕事になっていた Wordsworth が、*Tintern Abbey* の場合と同じように、この二篇についてはそれをしなかったことは、いかに Wordsworth の意にそうものであったかを示すものである。

注

- 1) William Wordsworth; *The Prelude*, ed. by Ernest de Selincourt, revised by Helen Darbishire, Oxford, 1968, p. 524. 以後、特に指示のない限り1805年版とし、*The Prelude* としてのみ示す。

- 2) 高橋康也・菅野昭正・野島秀勝・上島建吉・土岐恒二 『ロマン主義から象徴主義へ』[シンポジウム] 英米文学④, 学生社, 昭和50年, p.64及びp.136.
- 3) "My earliest Visitations" (*The Prelude*, Book VIII, l.124) 及び "I had felt/Too forcibly, too early in my life,/Visitations of imaginative power" (*ibid.*, Book XI, ll.251—4), 尚以後は *The Prelude*, XI, 251—4, といたように略して示す。
- 4) *The Prelude*, Book II, ll.367—71. 今後 *The Prelude* からの引用は, II, 367—71, のようにして示す。
- 5) *The Prelude*, p.525.
- 6) *ibid.*, p.558.
- 7) *The Prose Works of William Wordsworth, Vol. I*, ed. by W. J. B. Owen and Jane Worthington Smyser, Oxford, 1974, p. 149.
- 8) 例えば Wordsworth の作詩過程として,

Not Chaos, not
The darkest pit of lowest Erebus,
Nor aught of blinder vacancy, scooped out
By help of dreams——can breed such fear and awe
As fall upon us often when we look
Into our Minds, into the Mind of Man——
My haunt, and the main region of my song.

と *The Excursion*, ed. by E. de Selincourt and Helen Darbishire, Oxford, 1972, Preface to the Edition of 1814, ll.35—41, とうたわれている。この作詩過程は少しおどけた調子で *The Waggoner* ではこううたわれている。

Nor is it I who play the part,
But a shy spirits in my heart,
That comes and goes——will sometimes leap
From hiding-places ten years deep;
Or haunts me with familiar face,
Returning, like a ghost unlaid,
Until the debt I owe be paid. (209—15)

- 9) *The Prelude*, XI, 258.
- 10) 『ロマン主義から象徴主義へ』, 前掲書, p.144.
- 11) *Tintern Abbey*, l.105.
- 12) *ibid.*, l.108.
- 13) *ibid.*, ll.109—11.
- 14) *ibid.*, ll.106—7.
- 15) *The Prelude*, p.619.
- 16) *The Prelude* (1850), VI, 592—605.
- 17) 『ロマン主義から象徴主義へ』, 前掲書, pp.35—6.
- 18) *The Prelude*, p.558.
- 19) 上島建吉 (論文) 『見えない鳥たちについて—ロマン的想像力の逆説—』, イギリス・ロマン派研究, 1981, pp.26—7.
- 20) *The Prelude*, I, 306.
- 21) *Nutting*, ll.54—6.
- 22) *Encyclopedia Americana*, 1986, Vol. 1, p. 888.

- 23) *The Old Cumberland Beggar*, l.74.
- 24) *ibid.*, ll.77-9.
- 25) Joseph Warren Beach; *The Concept of Nature in Nineteenth-Century English Poetry*, Russell & Russell, 1966, p.47.
- 26) Carl Gustav Jung, 高橋義孝訳 ユング著作集1 『人間のタイプ』, 日本教文社, 昭和45年, p.4.
- 27) 樋口和彦著 『ユング心理学の世界』, 創元社, 昭和57年, p.79.
- 28) 同上書, p.80
- 29) C. G. Jung, 前掲書, pp.79-81.
- 30) *ibid.*, p.4.
- 31) 樋口和彦, 前掲書, p.83.
- 32) 同上書, p.84.
- 33) C. G. Jung, 前掲書, pp.85-7.
- 34) 樋口和彦, 前掲書, p.76.
- 35) C. G. Jung, 前掲書, pp.63-4.
- 36) 上島建吉著 『虚空の開拓』, 研究社, 1974, p.57.
- 37) 同上書, pp.56-8.
- 38) C. G. Jung, 前掲書, p.65及びp.67.
- 39) *ibid.*, pp.122-3及びp.125.
- 40) 上島建吉, 前掲書, p.59.
- 41) 同上書, pp.58-9.
- 42) C. G. Jung, 前掲書, pp.125-7.
- 43) 樋口和彦, 前掲書, p.55.
- 44) 同上書, p.54.
- 45) C. G. Jung, 前掲書, p.127.
- 46) *The Prose Works of William Wordsworth, Vol. III*, p. 63.
- 47) C. G. Jung, 前掲書, p. 129.
- 48) 上島建吉, 前掲書, p.63.
- 49) *The Poetical Works of William Wordsworth, Vol. IV*, ed. by E. de Selincourt and Helen Darbishire, Oxford, 1970, p. 463.
- 50) *The Prelude*, p. 620.
- 51) *The Oxford Anthology of English Literature, Vol. II*; General Editors, Frank Kermode and John Hollander, Oxford, 1973, p.175.
- 52) *The Poetical Works of William Wordsworth, Vol. IV*, p. 464.
- 53) *The Oxford Anthology of English Literature, Vol. II* p. 176.
- 54) *To the Cuckoo*, l. 12.
- 55) 前川俊一訳 『ワーズワス詩集』, 弥生書房, 1966, p.160.
- 56) *Tintern Abbey*, ll.80-3.
- 57) 樋口和彦, 前掲書, p. 91.
- 58) 上島建吉, 前掲書, p. 78.
- 59) 同上書, p. 77.
- 60) C. G. Jung, 前掲書, p. 130.
- 61) 上島建吉, 前掲書, p. 78.

参考文献

- 1) 上島建吉著 『虚空の開拓』 研究社 1974
- 2) 高橋義孝訳 ユング著作集 1 『人間のタイプ』 日本教文社 昭和45年
- 3) 樋口和彦著 『ユング心理学の世界』 創元社 昭和57年
- 4) 高橋康也・菅野昭正・野島秀勝・上島建吉・土岐恒二 『ロマン主義から象徴主義へ』 [シンポジウム] 英米文学④ 学生社 昭和50年
- 5) 磯田光一著 『イギリス・ロマン派詩人』 河出書房新社 昭和54年
- 6) 『イギリス・ロマン派研究』 第四・五号 第八号 イギリス・ロマン派学会 1981及び1984
- 7) William Wordsworth: *The Prelude*. Edited from the Manuscripts with Introduction, Textual and Critical Notes by Ernest de Selincourt, revised by Helen Darbishire, Oxford, 1968.
- 8) *The Poetical Works of William Wordsworth, Vols. I—V*. Edited from the Manuscripts with Introduction, Textual and Critical Notes by Ernest de Selincourt, revised by Helen Darbishire, Oxford, 1967—72.
- 9) Joseph Warren Beach: *The Concept of Nature in Nineteenth-Century English Poetry*. Russell & Russell, 1966.
- 10) Raymond Dexter Havens: *The Mind of a Poet, Vol. I*. Johns Hopkins Press, 1967.
- 11) H. W. Garrod: *Wordsworth*. Oxford, 1963.
- 12) Herbert Read: *Wordsworth*. Faber and Faber.
- 13) Jocomina Korteling: *Mysticism in Blake and Wordsworth*. Haskell House, 1966.
- 14) Melvin Rader: *Wordsworth A Philosophical Approach*. Oxford, 1967.
- 15) John A. Hodgson: *Wordsworth's Philosophical Poetry 1797—1814*. University of Nebraska, 1980.
- 16) *The Prose Works of William Wordsworth, Vols. I, III*. Edited by W. J. B. Owen and Jane Worthington Smyser, Oxford, 1974.